

# 光の子



No.98 2002. 6. 1

- わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、  
わたしにしたことなのである。(マタイによる福音書)



「風になつて」

え・中島英子

「代田」

朱をつくす空あり鶴の引きしあと

日に揉まれ風に囃され水温む

草原に朽舟ねむる春の月

切株の斧嘯んでゐい遅日かな

あをあをと八十八夜ひろがりぬ

隠沼こもりぬに頻波しきなみたてる五月かな

どこからとなく鶯つどふ代田かな

黛 執 (『春野』主宰)



# 共に生きるということ

施設長 菅原哲男



今年も、三名が高校を卒業した。車希は、隣接する市内の病院に介護助手として就職し、毎日帰ると患者さんとのやりとりを顔を輝かせて報告してくれる。時には、お年寄りが亡くなってしまったと瞳をうるませる。多歌音は病院で働きながら准看護学校で学び始めた。ほぼ毎週帰り、親切な先輩のこと、学校での出来事などを報告してくれる。時にはどうかと思うファッションを、やんわり担当者指摘され直したりしている。耕太は、いろいろ迷い、旅人の心を癒す仕事を目指してホテルマン養成の専門学校へ進学した。新聞奨学生というハードな選択である。

この三人は、光の子どもの家設立当初にやってきた幼児たちだった。どの子も、混乱した家庭事情のなかで生まれ育ち、自分以外人の存在を認知したくないというような言動がほとんどで、その幼い心に深い傷を負っていたことが明晰に見て取れた。人間に愛された経験をほとんど持たないかあってもわずかなそれだったので、人と関わる必要がある者には怖れであり、ある者には不安であり、そしてある者には絶望さえあったのである。だから、通常の範囲を著しく広げ逸れていく言動の毎日なのであった。命に関わるので一時も

目を離せない。エネルギーに充ち満ちていて、泥んこになり、追いかけて追いかけて夢中で動き回る。何はともあれ元気な子どもたちではあった。鮮やかに思い出される。

一人の保育士が五人までの子どもの責任を持つ担当制で、一般の母子に見立ててきたのである。いたずらお祝いのように喜ぶ・まさに子どもたちが失った家族のような関係を、自らの生活よりも子どもたちとの生活を楽しめるよう心も力も注ぎ続けてきたのである。そんな十数年が重なって、三人は、人様の役に立ちたいという願いの実現に向けて歩き出している。あの頃、誰が、こんな成長を想像できただろうか。

昨年度末には定員をはるかに超える三五名の子どもたちがいた。三名が退所してやれやれと思うまもなく四月一日に一人が入所してきた。かつての子どもたちよりも大きく深い傷や病を抱え、瘦せ、ひしゃげた、血が滴るような心しか持たない子どもたちである。この子どもたちをまっすぐに育てるには、銭金だけによつてはかかわらない。

何かうさんくささを感じさせた社会福祉事業基礎構造改革が、介護保険の導入にみられるように、社会福

祉の世界を様変わりさせている。介護ビジネスということばが何の抵抗もなく人々の口吻にのぼる。

ほんの二・三〇年前には、人の不幸が飯の種になるだろうなどこの国の誰も思わなかった。社会福祉施設に関わることは、十分な報酬が得られることなどではなかったのである。溺れている子どもと出会い、通り過ぎることが出来ず、思わず飛び込んでしまった、というのがそれまでのこの世界を担ってきた人々の『原点』であり、自分よりも、困難な状況にある人を生かそうとする決意や行為だったのである。この世界に専門職制度を導入し、共に生きるなどと言いつつ自分だけがまず生きられるようにしたあたりからそれが曖昧になったのだが。

まさに、船が難破して溺れかかり、しがみついた一人が助かる浮力しかないカルデアイアネスの船板を、他の溺れる者に差し向けてやる心や決意が、今、問われているのだ。

共に生きるとは、自分よりも他者をまず生かそうとすることに他ならない。私は、目の前の傷ついた瀕死の子どもたちに命を投げ出すことが出来るか。手厚い施策は今必要ではある。しかし、何よりもこの間に答えることが先でなければならぬ。

## 学もどきのつづやき ⑤③ 仙山線の列車の中で

山形大学 仙道 富士郎  
山形学 仙道 富士郎

山形と仙台の距離は、最近随分と縮まったように思える。仙台、山形間のJR線（仙山線）に加えて、高速度路を走るバスが、一時間に2、3本ある。所用時間はJR線とほぼ同じで、本数も多いので、バスを利用することのほうが多い。そのときもバスで思ったが、雪模様で、こんなときにはバスの時間はあまりあてにはならない。万が一仙台のホテルで開催される会議の時間に遅れてはと思い、仙山線を出かけることにした。土曜日だったので空いているものと思っていたら、空席はあるが、案外乗客が多い。あとでこのときの話をしたら、私が乗車した時間帯だと、山形から仙台の学校に通っている学生が多いのではないかとこのことであった。

たいいていの場合、仙山線では、列車の進行方向に平行に置かれている二人掛けの座席に座ることになっている。人と向かい合って座ることがな

んとなく煩わしい。この日もそうし

貧乏性で、僅かの時間なのに、列車の中で仕事をしたがる。このときも印刷した年賀状に添え書きする仕事を始めた。となりのあいている座席に年賀状の箱を置き、添え書きの終わった年賀状をその箱の蓋に入れていく作業を繰り返した。夢中になって仕事をしていたので、どこの駅かは分からなかったが、ドヤドヤと乗車してくる人の気配を感じて目上を上げると、事実多くのひとが乗車してきた。慌てふためいて店じまいをして、隣の席をあけた。学生らしい男のひとが隣に座った。

次の駅にまたかなりの人数の乗車があり、座席の間にも立っている人が現れ、ほぼ満員の状態になった。ところが、私はそのあとすぐに実に奇妙な光景を目の当たりにすることとなった。ほぼ満員の状態なのに、そここの座席がナツパザックで占領されているのである。そして、そのナツパザックの隣に座っている若者達は一様に眠っているように見える。

なんともすっきりしない。たかが一時間足らずの乗車時間、そんなに日くじらをたてなくても良いのではないかと自分に言い聞かせてみる。

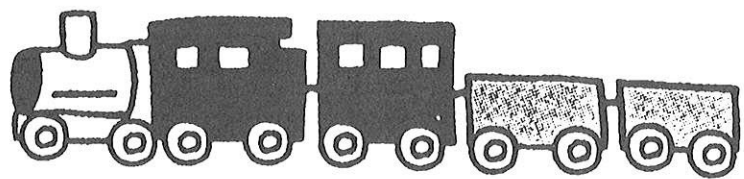
しかし、お年寄りや幼児には席を譲るようにと小さいときから教育されてきた年齢層に属する人間としては、どうにも納得がいかない。少子化が一つの原因だと思っただが、大分前から親が子供を叱らなくなったと思う。長男夫婦もさっぱり孫のことを叱らない。黙って見ていられなくなって、小生が孫を叱ることになる。その結果、小生はこわいおじいちゃんになってしまい、孫達にはあまりなつかない。

若者のいわゆる「マナー」の悪さが指摘されるようになって久しいが、本来動物としての人間はエゴイステックな部分を沢山持っている、幼児なども黙って見ていると、結構残酷である。そこを叱って人間としての道をたたき込むのが、親の務めのはずである。

どうもその構図は、我が国では崩れてしまったらしい。しかし、小生のような老人があまり声高にこのことについて吠えたとおかしなことになってしまふ。事の遠因は私たち老人にあることは、間違いないのであるから。

マナーの悪さは若者だけではないことを、最近また仙山線の列車の中で経験した。小生の向かいに座っていた老人

(とおほしき人)は満員列車の中で、小生側の座席の方に足を延ばし、自分の横に荷物を置いたままであった。側に立っていた婦人が座らせてもらえないかと訪ねると、その老人は返事もせず、荷物をとなりの席から持ち上げ、自分の膝の上に置いた。なんと不快な瞬間であった。一体この国は何処へ行くのだろうか。



## 2つの文化に生きる

32

日本キリスト教団東大宮教会  
バーガー 京子

今年は何年にもなく暖冬で桜の花が三月中旬に見事に満開になった。毎年四月に咲くはなみずきの花も今年は三月三十一日のイースターに蕾がほころび始めた。今年六月に高校卒業予定の長男は学校の卒業旅行で八日間フィリピンに出かけ、現地で教会堂を建てたり、貧しい人たちに衣類や食料を届けるといふ貴重な経験をして帰ってきた。

私達夫婦と言えは家の年間行事の一つになっている宣教師大会に三月末、出かけた。毎年、この大会には全国に散らばっている教団関係宣教師とその家族達が一ヶ所に集まって大会を行っている。今年の参加者は七十名だった。今年の大会のテーマは「キリスト教教育について」だっ

た。

ところでここ数年この大会に出席しながら私の中には大きな心の変化が起こってきている。以前は私はこの大会に出る度にどこか居心地が悪かった。それは夫も含め宣教師たちが久しぶりに会って再会を懐かしがり、どこかアットホームな雰囲気を楽しんでいる中、なんとなく溶け込めない自分がいたからだ。自分は宣教師でもないし、日本人だし、といったところが理由だったように思う。しかし、ここ数年、日本中に散らばっていた宣教師たちと再会する度になんともいえない懐かしさが込み上げ、又、初めて会う宣教師たちにもなぜか親しみを感ずるようになった。この気持ちに言葉にするとしたら「キリストにあつて私達は一つ」ということだと思ふ。共に生かされていることを心から喜びあっているからだ。このことを言葉でなく身を持って感じるようになった。これはここ数年、東大宮教会での長老、教会学校教師、アジア教会婦人会議委員や世界教会運動委員等と自分の力では到底できないような責任を負いながら知らず知らずのうちに自分という小さな殻から出て、周りを見る事ができるようになったからだと思ふ。感謝である。

さて、今回の宣教師大会のテーマの「キリスト教教育」である。日本の百三十年に遡るプロテスタント教会の歴史を細かく学びながら、キリスト教主義の学校とキリスト教会の関係を学んだ。そして初期の宣教師たちが滑稽とも思えるような様々な経験しながら日本へのキリスト教伝道をしてきたことも学んだ。日本で初めのクリスチャンが、侍たちだったことも改めて興味深いことだった。そしてクリスチャン人口が現在一%に満たないこの国で何が人々の足を引き止めているかという問題もあげられた。「日本人が、西洋の宗教と言われるキリスト教を信じながら、同時に日本人に愛されるにはどうしたらよいのか？」という壁にぶつかっていることもあげられた。

そして最終的には日本人のアイデンティティをなくすことへの恐怖が一番の問題なのではないかと指摘された。日本人のアイデンティティとはいったい何なのだろうか。それと同時にアメリカ人のアイデンティティとは何なのか。日本で十五年間宣教してきている男性が「日本の宣教は雲を掴むようだ」と発言した。最近日本に来た男性は「日本で宣教するには自分のアイデンティティを捨てて日本人にならなければ受け

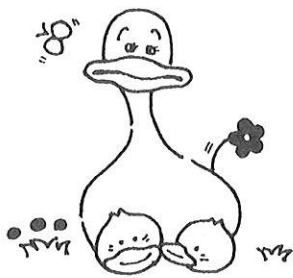
入れてもらえないのではないか？」という壁にぶつかっていた。そして、両方のアイデンティティを持った宣教師達の存在があることも見逃せない事実だった。

彼等にとって自分を日本人と名乗るかアメリカ人と名乗るか、又、日本で両方名乗ることは可能なのかは大きな問題だった。話は日本社会の「内」「外」に発展し、日本社会になじむには気の遠くなるような時間が必要であることも話された。

ところでその晩、同室した日本女性が京都から来ている方だった。二人でアイデンティティの話になり、彼女が言った言葉が印象的だった。

「私は京都に四十年住んでいるけれど今だに私は外の人よ。本当に受け入れられるには二、三百年住まなきゃだめだと思ふわ。」

異文化間アイデンティティの問題は日本人間にもあるようだ。



るのである。小鳥が食べてくれたのだ。餌台は成功である。気を良くした私は、又うどの残りを細かく切ったり、パンくずを集めたり、りんごを半分に分けて行ったりして、どっさりと補充した。これも大成功。翌日の夜には跡形もなくなっていた。しかし小鳥が食べている現場を見る事はできないでいた。

ところが、或る日、少し早めに帰ってみると、三十羽程のカラスが屋根の上にとむろして、何やらギョーギョー相談しているのである。餌台のまわりにも五、六羽おりていた。

私は事の次第を理解してしまった。今まで一生懸命になって餌の補充をしていたのに、すべてあの黒いギョーギョー達が持って行ってしまったに違いない。第一半分に割ったりんごをそのまま持つて行けるのは、あの連中以外にはない。以前にも家の木の上のタカノ巣と卵をメチャメチャにやられてしまった前例がある。私は怒った。もう餌台は取りこわした。だがあんなやつらに餌なんかやるものか、と思つた。

それにしても、カラスには食べさせず、小鳥にだけ餌をやるといふ方法は無いものか、私は今、困っている。

### ■ エッセイ ■

## 今日このごろ (鳥たち)

うぐいすが鳴いている。朝、目が覚める頃にはもう、盛んに鳴いている。今年はいつもの年よりも早く、はつきりと、にぎやかに聞こえるようだ。

今年のうちいすを最初に聞いたのは二月二十四日の朝である。二十四日は天神様ののほり立ての日で、九時に集合という事になっていた。そろそろ出かけようかと思つている時に、梅の木あたりでうぐいすが鳴いた。まだ下手であった。しかし、翌二十五日、天神様のお祭りの朝には、すっかり上手に鳴いてみせてくれた。私は嬉しくなって、会う人毎に「うぐいすが鳴いたよ、大分うまく鳴いていたよ」と伝えた。姿は見えないが、あのきれいな声を聞く、何となく嬉しい。

彼岸の中日に、隣の家の人が仏壇に線香をあげに来てくれた。お茶を飲みながらの雑談の中で「うちへはね、キツツキが来ているんですよ」と言った。「二、三日、カンカンカント、大工さんが仕事をしているよいうな音がしていたんですが、気がつ

いてみたらキツツキが、いちようの木に穴をあけてつたんですよ。」と言う。このあたりでは、大変珍しい事である。私は野鳥図鑑を取り出して見て貰った。「思つたよりもちっちゃくて、茶色っぽい色をしていたなあ。」という。しかし、それに該当しそうなのは沖繩にしか存在しないという種類とかだつたりして、はつきりしない。

その図鑑に黄色い付箋用紙が付いている。思い出した。去年の暮もおしつまった或る日の午後、家の前の柿の木の、枯れた幹にキツツキが来ていたのである。カンカンという音はたてなかつたが、赤い色のついたきれいな小鳥だった。私は急いでカメラを出してきて、二、三枚映しておいた。図鑑によると、アカゲラらしい事がわかった。頭のうしろと下腹あたりの赤い色が印象的であった。私は、このような鳥をこのあたりでは今までに見た事がなかつた。この鳥に限らず、最近珍しい鳥を、あちこちで見えるようになった。

先日、風の強く吹いた日、むく鳥

彫刻家 中島 陸雄

やらひよどりなどが、林の中でやましく騒いでいた。どんな理由かわからないが、兎に角ものすごい鳥の声である。何か小鳥の世界で大事件でも発生したか、大変めでたい事でもあるのか、と思わせるような騒ぎであった。

私は名案を思いついた。小鳥たちのために餌台を作ろうと考えたのである。あれだけたくさん小鳥が来ているのだつたら、きつと餌台の餌を取りつくらで食べてくれるであろう、という考えである。そして、こちらでは、その小鳥たちを観察するのである。

私は材料を買ってきて、日曜大工よろしく餌台を作りあげた。余り立派な出来栄ではないが、自分で作った餌台は満足すべきものであった。それを部屋から見える位置に立て、パンくずやりんごを置いてみた。

一日待っても二日待っても、近くにたくさん小鳥は来ているのに、餌台には近寄らない。四日目の夜、餌台の所に行ってみた。驚いた事に、パンくずはもち論、半分に分けてい





出発

その4

菅原 哲男

萌季がアメリカ留学を決定してからまた春がやってきて、今年も三名の高校卒業生が社会へ出発して行った。そして今年も、三月半ばの「出発(タビダチ)の会」で、挨拶に立った三人は、惜別の情を豊かに泣いた。駆けつけて下さった地域の方々や関わった元職員、ヴォランティアや、職員たちも涙を流していた。

児童養護施設光の子どもの家の設立を決定した時「別れを悲しむことの出来る」心を養う養育の実現を願った。それが多くの方々の豊かな心をお寄せいただいて、この数年こうして実現してきているのである。

その小さな心に大きな深い傷を負ってやってきた萌季と、一緒に乗り越え克服することを決意してした真実告知の日から約一〇年が過ぎた昨年春、高校卒業を目前にした萌季と隣り合って夕食をする機会があった。

「萌季、今、おまえさんは生まれてきて良かったって思えるかい?」と聞いた。

彼女は、しばらく確かめるようにしながら、「うん、良かったと思う」としっかりと答えた。「ほんとうに、

ここにきて良かった?例えば、

光の子どもの家で暮らしたこととか、

まり子さんに会えたこととか、

という、「うん、小さい頃はイヤ

だったり、何で自分だけが思った

ことたくさんあったけど、今はこ

で良かったと思うよ」「じゃあ、生

まれてきたことを良かったと思うん

だったら、生んでくれたことをあり

がとうって言える?」と問うと、し

ばらくして「すぐには言えない、分

かんないよそんなこと」と言った。

「でもね、大事なことだと思うか

ら、よく考えてね、生まれてきたこ

とがよかったら、親がいなかったら

生まれなかったんだよね、今すぐ答

えなくてもいいけど、よく考えてお

いた方がいいよ」と言ってその話は

終わりになった。

数週間後、萌季が進路のことで、

「やっぱり留学がしたい。国際的な

難民救済とか・そんな仕事が見

たいから、アメリカに行けたらいい

な、って思うんだけど、私って

怠け者だから、外国語は外国で生

活しなきゃ身に付かないと思うし、

」と言ってきた。その時は、ほんや

りと、出来たらいいなと思った。

それから数ヶ月、留学の可能性に

ついて、萌季は留学についての雑誌

などを買い求めてあちこち調べ始め

ていた。本当に留学したいという思

いが強まっていたのであった。

幸い、私にも少しばかりのコネク

ションがあり、それを頼りに可能性

を探していた。サンディゴに甥がい

て、教会の役員などをしていたので

その教会で何とか受け入れてもらえ

ないか、と問い合わせたり、シアト

ルの知り合いや、ずいぶん昔、デト

ロイトで世話になったお医者さんな

どもも当たってみた。はかばかしい

返事がないままに二ヶ月ほどが経っ

てしまった。そのうち、経済的なギヤ

ランテイのことも大きな壁になって

きた。それからしばらくしてインデ

アナポリスにつてがあり、三菱重工

アメリカ工場の人たちと連絡が取れ

て実現の可能性が生まれたのである。

前号でも書いたが、萌季が二歳で入

所した時に岩崎自身はじめて担当

者として受け入れ、それ以来、実の

親とも思えるような関わりを継続し

てきたこともあって、経済的なギヤ

ランテイを当面引き受けさせて欲し

いという申し出もあって、インデア

ナポリス大学への留学の道が開けた

のであった。

そんな時萌季が、「やっぱり親がい

なかったら生まれることも出来な

かったんだから、親にありがとう、っ

て言ってみたいな」とボソソと言っ

た。

入所して以来絶対受容を基底にし

ながら、保護と受容が主体の乳幼児

期から思春期前での真実告知までが

社会的養育の一区切り。真実告知に

至るまでが心理的にも社会的にも、

日のくらむ絶壁のような限らないほ

どのマイナスとの向き合いであった。

そこから、継続的に君に出会えてよ

かった、君が生まれたことをみんな

がこんなに喜んでいる、というメッ

セージを重ねた生活学習の時期が高

校卒業まで続くのである。

専門職制度の確立は重要である。

児童養護施設の職員の保障も緊急に

整備されなければならない。

しかし、それよりも、何にも増し

て最優先されなければならないこと

は、子どもたちが生まれてきてよかつ

た、と言えるような『自己受容』に

至る関わりと暮らしの整備であり、

それが可能になって、はじめて、期

待と不安がないままになった『自

立』へ向けて『出発(タビダチ)』

が可能になるのである。そんな事実

を萌季との十七年にわたる関わり

の中で教えられてきた。

現場から

続・光の子らしく

⑩

岩崎 まり子

「誰かに誰かにこれあげる!」  
「見てー!作ったの!」

春のうららかな日差しの中で、大きな独り言のような、はたまた脈絡のない会話のような、そんなやりとりでもお互い満足できる発達年齢の子どもたちが、体中を泥だらけにして泥だんご作りに精を出しています。新しい年度が始まりました。皆様、いかがお過ごしですか。

先日、チャップリンの「KID」という映画のビデオを頂き観ていたところ、三才の丘実ちゃんが画面に触発されたのか、いきなり

「丘実ちゃんも赤ちゃんの時ママに捨てられたの。」  
と言い出しました。

「違うよ。丘実ちゃんは、捨てられてなんかいないよ。」  
と話しましたが、納得していないような顔で、また画面の方に顔を向け、何やらぶつぶつと喋っていました。

子どもの感受性には、良くも悪くもはつとさせられます。その発言や反応に自分の関わりを省しさを反省させられたり、「間違えたかも」という恐れを抱かせられます。今回もこの丘実ちゃんの納得がい

かなかつたような表情を思い、考え続けています。ただ、あとき私が「捨てられたのではない」と言ったことに対しての責任は明白です。私は、そのことの責任は果たそうと思っています。抱っこしているように感じられない丘実ちゃんを、彼女が安心できるくらいの大きさで抱っこしてあげるように。

「こんなに素晴らしい私は、捨てられるわけがない」と丘実ちゃん自身が思えるくらいの生活を創ってあげよう。

今日も丘実ちゃんは、意気揚々と外遊びに出掛けます。

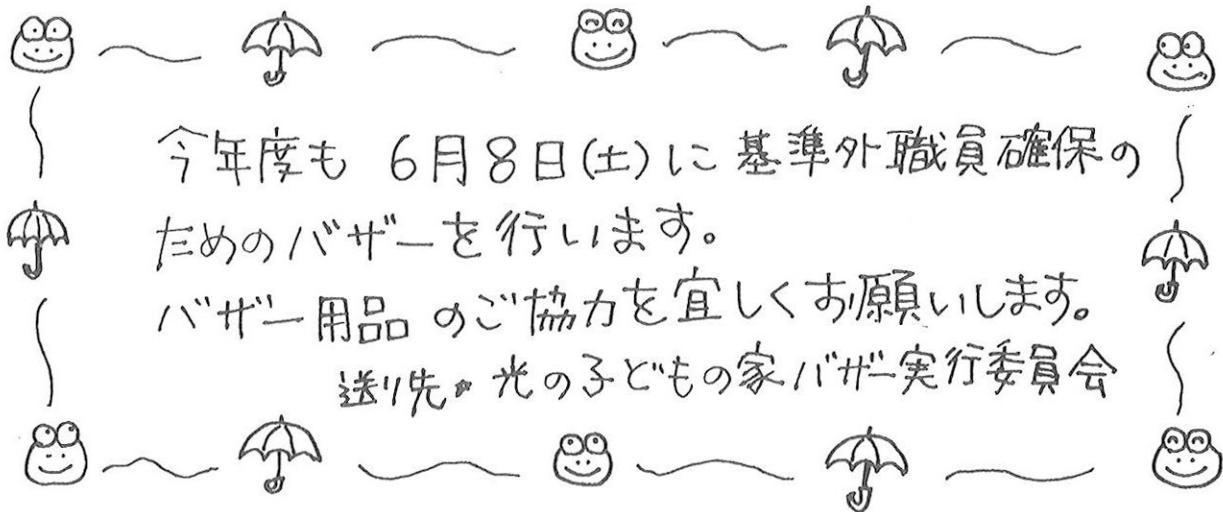
「まりこたん、まりこたんのなわとびかちてー(貸して)」「いいよ」「やったあ」そして、自分の背丈よ



私たちは、その瞬間に立ち合ってしまったが故の責任を果たすために、そして、親や彼ら親子を引き離すことを判断した児童相談所は、その瞬間に立ち合えなかった、立ち合えなかったが故の責任を果たすために、努力し、協力し合っているように願っています。

たくさんの幼児、新しい入所を受け入れ、光の子どもの家の歴史の第二幕が始まっています。私たちが間違えないよう、どうぞ折り、支えて下さいますように。





今年度も 6月8日(土)に基準外職員確保の  
 ためのバザーを行います。  
 バザー用品のご協力を宜しくお願ひします。  
 送り先・光の子どもの家バザー実行委員会

日誌抄 = 子どもと創る暮らしの風景 = 2001年11月1日 ▶ 12月末日

11月

- 3日 第64回理事会 補正予算と中間事業報告等を承認
- 第17回感謝の集い 全国でご支援下さる方々130  
 余名が一同に集い、山ノ下恭二東大宮教会牧師による感謝礼拝を捧げ、地域でご支援の篠崎忠広様及び  
 マリンバンドで楽しませていただいているレッド  
 ・ライブの皆さんに代表して感謝状をお贈りし、子  
 どもたちの成長を喜び合って和やかに。
- 10日 大利根町愛育班・後援会合同の昼食会
- Jリーグ観戦 埼玉県よりのご招待で 埼玉スタジ  
 アムこけら落とし 興奮の一夕
- 12日 江森ヘヤーサロン 整髪ご奉仕 感謝
- 15日 埼玉県所沢児童相談所より訪問調査。子どもの問題  
 について協議
- 18日 劇団新制作座よりのご招待で『どろかぶら』を鑑賞
- 22日 丘実(3歳)入所 佐藤家 岩崎保育士担当
- 臨床心理士角張先生来訪して職員のスーパーヴァイ  
 ズや心理療法の進め方などアドヴァイス

11月の物品寄贈者

江森百合子、東京電力大橋、文具のかもめ、高梨教会柿崎牧  
 師、社団法人電池工業会、岩槻教会、須藤喜代春、大利根藤  
 幼稚園、小城きい、小田原バプテスト伝道所、タカラブネ、  
 旗井高橋、越谷教会、川口教会の各位様

12月

- 2日 第1アドヴェント この日から4週間クリスマスの  
 準備とお祝いの夕食会を楽しく、そして厳粛に
- 6~8日募金活動 東大宮教会を中心とした「光の子ども  
 の家を想う会」が浦和駅頭に立ち・・
- 10日 各児童相談所訪問調査 情報交換と養育問題を協議
- 24日 クリスマスイヴ・キャンドルサーヴィス
- 25日 クリスマス ページェントを礼拝に お友達や家族  
 ご支援の皆様140名余がお集まり下さって 楽し  
 く 有意義に ファンタスティックな一夕
- 27日 下野要 入所 佐藤家市川保育士担当
- 28日 もちつき
- 29日 家庭訪問調整で可能な子どもたちの正月帰省開始

12月の物品寄贈者

はむこ会士信田隆 仙道貴美子 佳子 二本榎幼稚園 松永 新  
 田 篠塚 大野光江 増田政一 知覧児童学園 仙道清太郎 諏訪  
 日出子 白石澄雄 石井喜久子 ジャパンアート 国洋会 市川  
 千代子 はむこ会鈴木幸光 愛甲猛 館逸志 毎日新聞東京社会  
 事業団 三国コカ・コーラ 岡本道代 有働由美子 埼玉県書店  
 商業組合 東大宮教会菊池 婦人会杉本 株式会社ほっかほっ  
 か亭 高橋千恵子 津森 江森ヘヤーサロン 小倉隆芳 広美 加  
 須市不二家 東洋英和女学院小学部の各位様  
 こうして21世紀第1年を終えることが出来ました(くら)

/// // // // ———— 反 射 光 ———— // // // //

☆久しぶり旧友と出会い、大型連休は  
 どこへ行ったの?と聞かれました☆こ  
 の祝日が続く時期は大方の人にはレ  
 ジャーを楽しむことになっているよう  
 です☆日本国憲法の発布を記念し祝  
 う「憲法記念日」と児童憲章の公布  
 を記念し祝う「こどもの日」の間の  
 四日に第一七回子ども祭りを祝いま  
 した☆記念することの意味を伝え、  
 ある程度の子算を任せ「したいこと  
 してもいい日だよ」と解放したら、子  
 どもたちが計画し懸命に準備し、お  
 友達や家族を招いて、喜んでもらう  
 日に子ども祭りはなりました☆多くの  
 人々からご支援を受け助けられて成  
 長していますが心の裡には「隣にいる  
 人の役に立ちたい」という願いが基  
 本的にあるようです☆三月末に母校  
 の小学校の廃校式に参加しました☆  
 それほど子どもたちが少なくなってい  
 ますが今年も児童養護施設は増設さ  
 れています☆本当に子どもの日を全  
 国民が祝えるような国になるのは何年  
 後でしょうか☆その実現を願ひ励みま  
 す☆更なるご支援を! 切に (哲)